

フィールドにおける模倣と笑い

——熱帯雨林の中のコメディ映像の事例——

大石高典

キーワード：多文化状況，調査者／被調査者関係，模倣，ビデオカメラ

1. はじめに

カメルーンは、アフリカのなかでもコメディが盛んな国の一つとして有名である。とくに1980-90年代、カメルーン西部の経済都市ドゥアラを舞台に活躍したJean Miché Kankanの風刺のきいた演技はカメルーンのみならず、アフリカ各地で一世を風靡した。Kankanは、警官や官僚、政治家のものまねを取り入れたユーモアあふれた作品を多数発表した。Kankanの作品のみならず、都市を中心に発展し、カセットテープ、ラジオ、テレビ、インターネットなどを媒体に発信されてきたカメルーンのコメディ文化は当然ながら村落社会にも浸透している。本稿では、村落地域をフィールドとする研究者や野外調査の実践が、地域住民によってどのようにものまねの材料になったかについて、被調査者である地域住民によって偶然撮影された映像資料を事例として報告し、調査者と被調査者の間の社会関係の変容に笑いがどのように関与しているのか考えてみたい。

今日、ハンディカムなど携帯型のビデオカメラが普及したことから、これらを用いた現地調査が活発に行われるようになってきている。のみならず、映像作家、メディア、先住民運動組織などが活動のなかに映像実践を積極的に取り込み、国際的な情報発信をするようになってきている。

筆者の専攻する生態人類学では、「測る」ことを通じて対象とするアフリカ社会の生活原理にアプローチしてきた。私もまた、生態人類学の研究のためにカメルーン東部州にてフィールドワークを行い、狩猟や漁労の手続きを正確に記述する資料とするために資料映像を収集してきた。ところが興味深いことに、帰国後にビデオテープを再生すると、むしろ調査研究のテーマとは直接関係のない映像がほとんどであることに気付いた。研究テーマとしていた生業活動には休憩やおしゃべりなど様々な空白の時間があり、その間に被調査者である人々とカメラで遊んだ副産物が残されていた。以前、私は「民族誌の方法としてのホームビデオ」という論考で、私自身が撮影した映像記録をもとにカメラが作り出す眩惑的な空間が参与観察における調査者と被調査者の関係に及ぼす影響について紹介したことがあるが(大石, 2011)、ここでは、ビデオカメラを用いた撮影経験が皆無、ないしほとんどないカメルーン東南部のインフォーマントによって、偶然に撮影された映像資料を材料として検討してみたい。本稿は、本節のほか、2節の「調査地域の概要」、3節の「事例と分析」、4節の「むすび」からなる。

2. 調査地域の概要

本稿で紹介する事例は、カメルーンとコンゴ共和国の国境を流れるジャー川沿いに位置するND村を舞台とする(図1)。付近一帯は、コンゴ川の支流であるブンバ川とジャー川に挟まれた熱帯森林地帯である。

ND村周辺の年平均気温は25度、年平均降水量1500mm前後と温暖多湿である。9月中旬から11月までと4月から6月までの年2回の雨季、12月から3月までと7月から9月中旬まで同じく年2回の乾期がある。植生は、一部にマメ科ジャケツイバラ亜科のエベン(*Gilbertiodendron dewevrei*)の木が優占する常緑熱帯雨林が点在するほかは、アオギリ科、ジャケツイバラ亜科、シャクンシ科の高木が林冠をなす半落葉性熱帯雨林と、河沿いに密生するマングローブのような呼吸根をもつエッセブ(*Uapaca paludosa*)の列の中に樹高の高いドゥム(*Ceiba pentandora*)が目立つ河辺林、ラフィアヤシが卓越する湿地林によって構成される。その中に点状に湿性草地が混じる。加えて定住集落周辺や集落跡には、人為的に形成された異なる遷移段階の二次林が見られる。そのような陸地を縫って、コンゴ川の支流であるジャー川とその無数の支流が流れている。

ND村は、カメルーン独立前後の1960年に、ジャー河の上流方面から移住してきた漁撈農耕民バクウェレの数世帯を中心に作られた定住村で、6つの小集落からなり、行政村の単位にもなっている。1980年代前半に伐採会社が基地を構えるまでは、車が通れるような道路はなく、近隣の村むらや最寄りの町へは徒歩か丸木舟による水上交通によるしかなかった。

現在は、もともとの住民であるバクウェレと狩猟採集民バカ・ピグミーのほか、伐採会社に雇用されていた近隣地域の農耕民バンガンドウやカメルーン北部などに出身村をもつハウサが伐採会社撤退後も残り定住する。現在の人口構成は、バカ・ピグミー61世帯300人、バクウェレ40世帯250人、ハウサやフルベほか10世帯50人である(合計550-600人)。

2003年には、ND村に京都大学の研究グループによる調査基地が設置された結果、日本人研究者による生態人類学を中心とする様々な研究が盛んにおこなわれるようになった(林・大石, 2012)。

私は、2002年からバカ・ピグミーと隣接して居住する農耕民バクウェレに関する研究を開始し、河川沿いの農漁複合の実態について、ジャー川下流域に居住するバクウェレ人を対象とした研究を進めるとともに(大石, 2010)、換金作物であるカカオ栽培の活発化など貨幣経済の浸透に伴ってみられるようになった社会経済上の変化が民族集団間の相互関係に与える影響に関する研究を進めてきた(Oishi, 2012; Oishi & Hayashi, 2014など)。



図1 ND村の位置。

3. 事例と分析

まず、映像資料が生まれた経緯について簡単に述べる。2004年4月に、野外調査のために入った森のキャンプで、私は熱帯熱マラリアに罹患し、同行していた村びとの助けで集落に緊急脱出をした。その際、一時的にテントをはじめとする調査機材はキャンプ地に置き去りにせざるをえなかった。近くの地方都市の病院に入院した私は、調査助手らにキャンプに置いてきた物品の回収を依頼し、彼らはキャンプに向かった。そこで、彼らはキャンプに残っていたビデオカメラを用いて映像を撮影していた。私はそれに気づかないまま帰国し、DVフィルムを確認したところ、調査助手やインフォーマントによって撮影された映像を確認した。ビデオテープには、以下の内容が記録されていた：(1) 夜間、暗いテントの中の映像 (2) キャンプ周辺の物の静止画像、(3) コントを演じる2人組の映像、(4) 漁獲調査の映像。その後、調査地を訪問した際に撮影の動機をDBに尋ねたところ、撮った映像を外に発信することだったと言う。ND村の中では問題になるだろう内容でも、日本で見られるならよいということであった。

ここでは、(3)と(4)に該当するビデオ・クリップの内容を紹介する。ビデオ・クリップへの登場人物は¹⁾、デイビッド (DB)、アニカ (AC)、ンギマ (NG)、ダリー (DL) の4名で、このほか、オオイシ、アレックス、ローラ、メアリーの4名が作品の中で言及される。ダリーはデイビッドの息子である。これらのうち、DBとACはバクウェレ男性、NGはバカ・ピグミーの青年、アレックスはセネガル出身のフルベである。

DBは2004年から調査アシスタントとして、言語調査を始めとするフィールド調査の補助を依頼していた。ACはエンジン付き丸木舟の運転手兼漁師として、アレックスは、地元漁民とは異なる漁撈活動であるはえ縄漁の一種であるンガル漁を調査者に見せるために調査キャンプに参加していた。コントは、日中、アレックスがはえ縄の見回りに出かけてキャンプを留守にしている間に収録されている。

使用されている言語はバクウェレ語やバカ語などの現地語ではなく、終始フランス語で会話が続く。DBによれば、台詞やシナリオが用意されることなく、全てアドリブで撮影が行われたという。

【ビデオクリップの書き起こしテキスト1:「科学研究」】

1. DB: Allo, allo, Bamenda.

「もしもし、もしもし、バーメンダ。応答せよ。」

2. AC: Allo.

「もしもし。」

3. DB: Allo, Bamenda, Bamenda.

「もしもーし。バーメンダ、バーメンダ。」

4. DL: Papa, bee. Papa ne cahier de yo. O uh radio.

「パパったら。見てよ。ノートを持って、おーラジオに出てる。」



図2 コントの様子 (「科学研究」)

5. AC: Oui.

「はい。聞こえています。」

6. DB: Ah Bamenda, on vous appelle. Depuis nous sommes arrivé ici, Oishi était malade pour longtemps et on a évacué toute la nuit pour arriver au village, et tout de suite il a pris la voiture pour aller à Moloundou suivre un traitement. Alors c'est pour cela que (on) vous fais rapport pour dire que Oishi est malade. Donc travail n'a pas pris pas encore. On a pas encore débuté le travail. Maintenant nous sommes à la tente de Alex qui essaye de se deboullouier avec la pêche pour avoir quand-même un morceau de savon au retour. Alors Dally, regardes si les images sont en train de passer.

「あー、バーメンダ。応答せよ。ここに着いてから、オオイシは長いこと病気でした。それで徹夜でND村に避難させたのですが、彼は治療を受けるために、すぐにモルンドゥに行く車に乗りました。ですから、報告をします。オオイシは病気であると。だから仕事もまだできていません。まだ仕事を始めてもおりませんでした。今、われわれはアレックス氏のテントに泊まっています。アレックス氏は帰りにひとかけらの石鹸でも買えるようにと漁を頑張っています。ところで、ダリーくん、ちゃんと画像が写っているか見てくれないか。」

7. AC: Oui j'ai compris.

「はい、了解しました。」

8. DL: C'est bon.

「写っているよ。」

9. AC: Eh maintenant qu'est-ce que vous allez faire ? A cela.

「えーと、これからあなた方はどうされるんですか？とりあえず。」

10. DB: Ce qu'on peut faire maintenant, c'est récupérer d'abord les materiels, en suite, on va faire encore ce qu'on trouve les initiales du travail qu'on irait à faire.

「今からできることは、まず、荷物を集めて持って帰ること。それから、仕事のうち肝腎だと思われることもするつもりです。」

11. AC: Et le blanc, çava en peu ?

「それから、その白人の調子はどうですか。良くなりましたか？」

12. DB: La situation de le blamnc est déjà en peu normal.

「白人の体調は改善しました。」

13. AC: OK..Maintenant je peux te demander une question la ?

「分かりました。では、一つお尋ねしても良いですか？」

14. DB: OK.

「了解です。」

15. AC: Qu'est-ce que.. qu'est-ce que vous faites dans la forêt ?

「あなた方はいったい、いったい何を森の中でされているのですか？」

16. DB: Depuis nous sommes pour la recherché scientifique.

「科学研究のために私たちはここに来ているのですよ。」

17. AC: Scientifique..OK. Après ?

「研究。わかりました。それ以外には？」

18. DB: Après on pousse de une petite pêche de nutrition, c'est-à-dire la pêche de subsistance.

「他にはちょっとした自給用の漁をしています。いわゆる「生存のための漁撈」ですね。」

19. AC: Ce sont les chinois ?

「あなた方は中国人ですか？」

20. DB: Non, ce ne sont pas de mission chinoise, mais plutôt la mission japonaise.

「いいえ、私たちは中国のミッションではありません。むしろ、日本のミッションです。」

21. AC: Japonaise. OK. C'est bon, c'est bon, c'est bon.

「日本のですか。了解です。それはいい、いい、いい。」

22. DB: Voilà Bisso.

「ほら。」

スクリプト1とスクリプト2は、コント形式になっている。この形式の提案をしたのはACだという。ACは、ヘッドフォンをつけてDJの格好をする、ラジオを手にもつ、などの演出を行なった。ACは、以前に他の調査者Iの調査補助をする中で、ビデオカメラで魚を撮影する経験をしたことがあったという。

コントの中身に出てくる登場人物名は実際に存在するが、状況の設定は仮構の設定になっている。DBがBamenda (スクリプト中「バーメンダ」)にいるACにレポートをするという設定になっているが、Bamendaはカメルーン北西部の英語圏にある地方都市で、調査地からは1,000km以上離れている(図1)。ビデオ・クリップの撮影に関係した4名は地名は知っているが、いずれも訪問経験がないということであった。

内容を見ると、短いコントの中で筆者による「科学研究」への素朴な疑問とそれへの解答が提示されている(調査者は何をしに自分たちのところに来ているのか、調査者は何者なのか、調査によって何が得られるのか、など)。「生存漁撈」など、調査目的についての語りには外部から取り込まれた知識が用いられている。

【ビデオクリップの書き起こしテキスト2: ドウアラ帰りの男】

1. DB: La soirée est toujours culturelle. On va prendre quatre-vingt bières dans la soirée. Je pense que ça serait nécessaire pour toi.

「夜はいつだって文化的じゃなくちゃ。今晩は80本のビールを飲みましょう。君にはそれが必要だろ？」

2. NG: ... (rire)

「。。。 (笑い)」

3. DB: OK. Tu étais à Douala et son retour maintenant.

「わかりました。あなたはドウアラに行ってい



図3 コントの様子(「ドウアラ帰りの男」)

て、今はその帰りなのですね。」

4. NG: Wai.

「ういす。」

5. DB: D'accord. Qu'est-ce que tu as vu en peu à Douala ? Il y avait beaucoup de fille ? Parce que dernièrement quand j'étais à Douala j'ai baisé une fille, et au village j'ai baisé la fille qu'on appelle Marry. Wahahaha. Il faut qu'on pense.. Hahaha.. Parce que ça risqué de causer beaucoup de problèmes. Anica, Anica baise Rola tous les jours. A bientôt il va la donner grossesse. Alex ne peut pas beser toujours parce que Alex il n'a pas de bangala qui n'est pas fort.

「了解しました。ドゥアラでは何を見ましたか？いっぱい若い女性はいましたか？というのも前にドゥアラに行ったとき、私はある女性と寝ました。そして村ではメアリーという名の女性と寝ました。わはははは（笑）。ちゃんと考えて物を言わないと、ははは（笑）いろんな問題が起こる可能性がありますね。アニカ、アニカはローラと毎日寝ていますね。間もなく、子どもができるでしょう。アレックスは、あまり女性と寝たがらない。なぜかと言うと、アレックスのバンガラ²⁾は弱いから。」

6. AC: Pas puissant.

「強くない。」

7. DB: Hahaha..ce n'est pas fort.

「ははは（笑）。強くない。」

このビデオ・クリップは、スクリプト1の直後に続けて撮影されている。DBとACに加え、バカ・ピグミーのNGが登場して、NGはDouala（ドゥアラ）という都会から帰ってきたばかりという設定になっている。コントの中で、会話は終始DBがリードし、NGの発話はごく短い笑っているかのいずれかである。NGはむしろ強引に出演させられたのかもしれない。

Douala（ドゥアラ）は、カメルーンの南西部にある最大の経済都市である。スクリプト2のBamenda（バーメンダ）と同様に、仮構の「ドゥアラ」が登場し、都市を表象する「ビール」と「若い女の子」が印象的である。そこから、不倫関係をめぐる噂話が展開する。さらに、会話の中で、同じキャンプに滞在しているアレックスがインポテンツ気味であるという話題が語られる。DBは、撮影時点で、村では流されることがまったく想定されていないであろうにも関わらず、放送倫理の問題を気にしている。

次に、調査の実践そのものの模倣が主題となっているビデオクリップに記録された会話内容を見てみよう。

【ビデオクリップの書き起こしテキスト3：漁獲調査ごっこ】

1. DL: Uhhh..Uhhh...

（鼻歌）

2. DB: Son nom, c'est qui ? Bule ?

「その魚の名前は何？ブーレですか？」

3. AC: Qui ?

「どれ？」

4. DB: Ça c'est Bule?

「これって、ブルーかな？」

5. AC: Non, ca c'est zelengyi.

「ちがう。これはゼレンギイ。」

6. DB : Non, ça. Petit-ci.

「いや、これ。このちっちゃいの。」

7. AC: Petit-ci ? C'est bule.

「小っちゃいのか。これはブルー。」

8. DB: Bule ! Bule sur la mesure de 400 et 120 de large. Maintenant il manque de poids. Non ici la. Prends le poids de..

「ブルー！400ミリの長さで120ミリの幅のブルーと。さあ、重さがまだだ。重さを測ろう。」

9. AC: Bule.

「ブルーの。」

10. DB: Hehehe, poids de Bule. C'est rien que le nom pourtant que son corps est trop petit.

「へへへ、ブルーの体重。名前ばかりで小さいな。」

11. AC: Hahahaha...c'est dangereux.

「はははは（笑）、ヤバいな。」

12. DB: Dangereux. On va mesurer.. ça fait combien ? Trois-cents..

「ヤバいな。さあ測ろう。いくらかな？300。」

13. DL: Ehya !

「ヤー！」

14. DB: Mili-gram.

「ミリグラム。」

15. AC: OK.

「了解。」



図4 「漁獲調査ごっこ」の様子。

このビデオ・クリップは、私の漁撈活動の調査において、漁獲された魚の重さを「測る」ことが、調査の上で重要であるという観察を反映している。また、私が頻発しがちな「さあ測ろう」「ヤバいな」など口癖をまねている様子がわかる。魚を「測る」という行為が「研究者ごっこ」の遊びになっている。

4. 結び

フィールド人類学者は、調査対象とする人々の生業や社会を理解するために、その社会に入りこんで参与観察を行なう。時間や場所を共有し、同調することによって調査対象の世界に近

づこうとする。それは調査対象のまねをすることであるとも言える。「魚を測る」調査は、調査者としての筆者にとって、地域住民の実践に近づくための手段のひとつであった。しかし、調査対象であるバクウェレやバカ・ピグミーの人々にとって、なぜ、私が生業活動の成果である魚を大真面目に漁獲を測るのかは、たびたびの説明によっても理解が困難なことであったと思われる。

前節で紹介した事例は、被調査者に近接しようとする私のパーソナリティや実践が、ものまねの材料となっていたことを示している。調査者は、被調査者の世界に近づくために不器用にまねをするが、被調査者もまた理解が困難な調査者やその実践を「まねる」。ニセモノの地域住民とニセモノの人類学者が、すれ違いながら同じようにはできないとわかっている互いの行為をやってみようとする。その過程で、相互に不可知な意図が異化される時、笑いが生起するのではないだろうか。

しかし、DBらは、コミュニティのはるか外の日本にいるわれわれにいったい何を発信したかったのであろうか。日本で、試みにビデオ・クリップを上映したセミナーや研究会の参会者が笑ったことは確かであるが。本稿の紹介事例について、メディア論的に検討することは今後の課題としたい。

謝辞：本稿は、立命館大学国際言語文化研究所「アフリカの社会と笑い研究会」での発表・討議内容をもとにしている。カメルーン共和国での現地調査および資料のとりまとめには、文部科学省科学研究費補助金（B）「コミュニケーションプロセスとしての生態人類学」（代表：木村大治、課題番号：14401013）ならびに若手（B）「カメルーン東南部狩猟採集社会における遅延報酬の許容と萌芽的な社会階層化」（代表：大石高典、課題番号：26870297）による支援を受けた。

注

- 1) 本稿であつかう人名は、筆者（大石）を除き、すべて仮名である。
- 2) 男根の意味を表す俗語。西アフリカをはじめ、フランス語圏アフリカでもちいられる。

参考文献：

- 林耕次、大石高典 2012. 「狩猟採集民バカの日常生活におけるたばこ酒—カメルーン南東部における貨幣経済の浸透にともなう外来嗜好品の流入—」『人間文化：Humanities and Sciences』30号，pp. 29-43. 神戸学院大学人文学会.
- 大石高典 2010. 「森の『バカンス』—カメルーン東南部熱帯雨林の農耕民バクウェレによる漁労実践を事例に—」，木村大治、北西功一（編）『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅱ—』pp. 97-128. 京都大学学術出版会.
- 大石高典 2011. 「民族誌の方法としてのホームビデオ」，新井一寛，岩谷彩子，葛西賢太共編『映像にやどる宗教，宗教をうつす映像』，pp. 141-143. せりか書房.
- Oishi, T. 2012. "Cash crop cultivation and interethnic relations of the Baka Hunter-Gatherers in southeastern Cameroon." *African Study Monographs*, Supplementary Issue No. 43. pp. 115-136.
- Oishi, T., Hayashi, K. 2014. From ritual dance to disco: Change in habitual use of tobacco and alcohol among the Baka hunter-gatherers of southeastern Cameroon. *African Study Monographs*, Supplementary Issue No. 47. pp. 143-163."